

# 目取真俊の台湾表象

——「魚群記」「マーの見た空」をめぐって——

山原 公秋

## 1、「日本復帰」と台湾系沖縄移民

沖縄の「日本復帰」(一九七二年五月一日)の直前に執筆された『沖縄ノート』<sup>1)</sup>のなかで、大江健三郎は、「日本人とはなにか」と繰り返し問いかけている。「日本が沖縄に属する」と題した章は、次のような文章で閉じられている。

今日の日本の実体は、沖縄の存在のおかげにかくれて、ひそかに沖縄に属することによってのみ、いまかくのごとくに、せの自立を示しているのだと透視されるであろう。日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか、と貧しい心で考えあぐねつつ僕が沖縄の空港に、港におりたつ時、僕の意識にある地図においてもまた、日本は沖縄に属する。

沖縄の「復帰後」(ポスト返還期)の(へいま)を生きている者にとつて、日本が「にせの自立」しか成し得ていないという認識は、誰の目にも明らかであろう。特に、同書で展開される、沖縄米軍基地の核兵器の問題についての大江の考察は、今日でも学ぶところが多い。日本が沖縄の犠牲の上に存立している以上、「日本は沖縄に属する」のである。

しかし、これまで既に指摘されてきたように<sup>2)</sup>、大江が執拗に繰り返している「日本人とはなにか、このような日本人ではない」ところの日本人へと自分をかえることはできないか」という問いには違和感が残る。大江の問いの出発点は、まず「日本人」であつて、その問いの帰着点もまた「日本人」なのである。そのような問題設定のなかで言及される「沖縄人」は、「日本人」変革のための媒介としてのみ扱われている。その意味で、同書は、沖縄「ウチナーの(他者性)」を媒介に、「日本人」の共同性を立ち上げてきた同代的な「南島言説」と同型である。これを「オリエンタリズム」<sup>3)</sup>、「南島イデオロギー」<sup>4)</sup>と呼ぶかは別にしても、沖縄は

あくまでも「内なる他者」としてのみ同定されている。

大江の言葉には、確かに、倫理的な切実さはある。だが、大江が自己自身を「ドブ鼠」、「穀つぶし」、「非力な臆病者」と表現するとき、沖繩に対して悔い改める者としての文学的誇張があることは否めない。同書で例示されている様々な抑圧者<sup>11</sup>「このような日本人」を、自己自身の似像として引き受け、「日本人らしく醜い」と書くことのできた大江は、一方で、「沖繩人」を「被害者」一色に塗りつぶしてしまっている。大江の描く「沖繩人」は、均質的に被害者化され、表象されている。「日本人」が「醜い」のなら、「沖繩人」は清浄で無垢な「被害者」としてのみ存在するのだろうか。大江の内部で払拭されていない国民国家的な思考では、沖繩の内部での差異や抑圧の構造は覆い隠される。大江が、沖繩の「復婦問題」を念頭において、「沖繩ノート」の執筆にとりかかったということがあるにせよ、「復婦」へとなだれ込んでいく政治プロセスの渦中で、沖繩にも日本にも、どこにも「帰属」(「復婦」)するべき(場所)を持たない存在に対する注意は払われていない。沖繩におけるポスト・コロナリアルな暴力性は、日本／沖繩という二項対立的な思考だけでは見えてこない。

その大江健三郎とは異なつて、目取真俊は、「日本復婦」直前の時代状況を振り返るなかで、台湾系の沖繩移民に焦点をあてた「魚群記」<sup>12</sup>「マリーの見た空」<sup>13</sup>を書いていく。「魚群記」では、沖繩島北部集落に入植してきた「台湾女工」との「接触」が描かれており、「マリーの見た空」<sup>14</sup>では、台湾女工と沖繩男性との間の混血

児(強姦から生まれた子供)を形象している。この二作では、沖繩人の「被害者性」ではなく、「加害者性」が徹底して問題化されている。

日本の植民地主義に翻弄された歴史を持つ沖繩と台湾は、互いに地理的な隣接性を生きた中で様々な「接触」を経験したが、その一つは、バインアップル産業の沖繩への移入である。沖繩バイン産業の発展に大きな功績を残した台湾系沖繩移民の林発によれば、日本統治下の台湾では一時期、全島に七五のバイン工場が林立し、バイン産業の隆盛の時代があった。ところが台湾総督府の命で統制経済政策の一環として、強制企業統合がなされ、台湾合同鳳梨岳詰株式会社(社長は赤司初太郎)に統合されてしまう。企業合併のため失職した台湾人工場長や、日本人工場長のもとでの差別待遇に不満をつのらせていたバイン農家の人々は、新たなバイン栽培地をもとめて台湾の外に目を向けるようになる。そこで、台湾に近く、未墾の土地の多い沖繩県石垣島の高田、名蔵地区に目をつけ、林発らが計画的に移民を募集し、大同拓殖株式会社を設立したのは一九三五年のことである。

沖繩にバイン産業が本格的に根づいたのは、戦後に琉球政府の制定した「バインアップル振興法」(一九六〇年)以降である。サトウキビと並んで、バインアップルは戦後沖繩の二大基幹産業として発展、石垣島および沖繩本島北部にバイン工場が林立した。そこで、低賃金で使える出稼ぎの台湾人女工を工場に雇い入れたが、「日本復婦」と「日中国交回復」(一九七二年九月)によ

って、日本に帰化できない在沖台湾人は本国に送還されることになった。台湾女工達は、「沖繩施政権返還」（「日本復帰」）や「日中国交回復」といった政治プロセスに翻弄された存在である。「魚群記」の舞台は、「日本復帰」をひかえた沖繩本島北部集落のバイン工場である。

## 2、テラピアという（外来魚）

「僕は今でも指先にはつきりとあの感触を思い出す」と「魚群記」の冒頭は書きはじめられている。この語り手は、テラピアの瞳孔を射抜く指先の感触、身体的な実感を回顧しながら、現に書記行為を行っている「いま／ここ」から視点を過去に移し、自己の少年時代の出来事を再現していく。作中で語り手は「復帰」直前の時代の雰囲気を中心に説明している。

基地らしい基地もない北部の小さな農村であるこの村には、中部や那覇のような激しいデモや大規模な集会は無かったが、祖国復帰要求の集会は村にあるいくつかの工場や広場で時おり持たれていた。（中略）コザ暴動の号外が早朝の静けさを破って村内を駆けまわってからは、さすがに僕らも多少は時代の空気を呼吸せずにはいられなかった。

作品舞台は「激しいデモや大規模な集会」のあった「中部や那

覇」からは離れた「北部の小さな農村」であり、「祖国復帰要求の集会」や「コザ暴動」は「多少は時代の空気」と表現される程度である。「基地らしい基地もない北部の小さな農村」とあえて明示されているあたりなど、米軍との闘争の（現場）からの距離感がある。

語り手の兄が、バイン工場で「祖国復帰要求」の演説をする場面がある。そこで働く沖繩人工員は、「復帰の歌」を歌う。「固き土を破りて／民族の怒りに燃ゆる島／沖繩よ……」と。傍で見ていた台湾女工達は、それを「黙って聴いていた」。彼女達は、その沈黙のなかでいったい何を思っただろうか。「祖国復帰」、すなわち沖繩と本土の「一体化」を訴えるナシヨナリズムの時代にあつて、その政治力学から排除される存在に、目取真俊は焦点を当てる。「民族の怒り」の勇ましさは、台湾系移民に対する排斥へとつながっているのである。

語り手の「僕」は、友人のNやYやSと一緒に、M川の川口でテラピア釣りに熱中している少年の一人だ。対岸には父と兄が働くバイン工場があり、そこに季節労働者の台湾人女工達がいる。沖繩の男達は、彼女らを「台湾女（たいわんいなか）」と呼んでいる。「その言葉には蔑と猥雑な響きが込められていた。僕らは大人達の会話からその言葉の裏の語感まで敏感に嗅ぎとり、何の抵抗もなく真似して使っていた」と、語り手はいっている。

少年達は、父親から女工達への接近を禁止されているが、仲間たちとバイン工場の側の川辺でテラピアの瞳孔を射抜く遊びを繰

り返している。

それは目を見張らずにはおれないくらい夥しい数のテラピアの群れだった。底の方からどンドン湧き上がって来る直径五メートルはあろうかという雨雲のような黒い群れ……。食欲に汚物を喰い漁り、あらゆる在来の魚類を脅かすまでに急速に繁殖して来たこの外来魚のすさまじい生命力に圧倒されて、僕は口々に感嘆の声を漏らした。

パイン工場から流れ出す熱湯や裁断屑によって、〈在来〉の魚が次々と死に絶えていくなかで、〈外来魚〉のテラピアだけは急速に繁殖していく。このテラピアの「原産地はサハラ砂漠以南のナイル水系から東アフリカ一帯」で、「沖縄には1954年(昭和29)に食用魚として台湾から移入された」。〈外来魚〉のテラピアの移動が、ここでは台湾女工達の移動の経路と重ねあわされている。このテラピアは、季節労働者として沖縄島にやってきた台湾女工達をあらわすメタファーとして機能する。この〈在来〉／〈外来〉という関係性は、沖縄人と台湾女工との関係に置き換えることができる。

台湾女工達は、沖縄人の生活空間とは厳重に隔離されている。彼女らの「宿舍は赤錆びたバラ線て囲われて」おり、「川岸に植えられた木麻黄の防風林と、壁に沿って高く積まれた古い木箱が、建物の大半をこの角度からは隠していた」とある。さらに、

少年達は「工場の中に入ることは許されなかった。もし、守衛に見つかり、つかまりでもすれば、殴られ叩き出されるのが落ちだった」。台湾人の生活空間は集落の人々にとつて禁忌の対象でありタブー化された場としてある。

この作品は、沖縄人と台湾人との間の境界を突き破る領域侵犯的な行為が、テラピアの瞳孔を射抜くという直截な身体感覚を介して表現されている。テラピアの眼球を射抜くということが、沖縄と台湾の「接触」をあらわすのである。「触覚があらゆる感覚よりも著しく発達」しているという少年達は、川べりでテラピアを釣っては、眼球に指先を埋め込ませ、弄ぶ。「標的はあくまでも瞳孔」であり、「視覚」ではなく「触覚」を通じた関係に執着する。「僕」は、恋焦がれる「K」という台湾女工に対して、次のような倒錯的な感情の動き方をする。

夜毎僕を苦しめるその欲望のざわめきが、彼女の目を初めて見た時に吸い寄せられるように触手を伸ばした。他の女工達とは違ったもの悲し気な瞳の深さが、魚の眼球が呼び起こす指先のあの感触を蘇らせた。言いようのない恐れが僕の肉体の奥で不安定な球形を造り、それを貫こうとする衝動が、彼女の存在を今まで味わったことのない強烈さで感受させた。

台湾女工への「欲望のざわめき」は、「魚の眼球が呼び起こす

指先のあの感触を蘇らせ」る。「僕」の台湾女工への恋慕は、テラピアの眼を射抜きたいという欲望と等価なものとして表現されている。「僕」はテラピアの眼球を射抜くようにして、「K」の眼球を射抜きたいと欲望する。しかし、眼を射抜くという暴力的な行為は、言うまでもなく、相手に「痛み」を与える行為であり、沖繩人の加害的な振る舞いと結びついていることに注意しなければならぬ。たとえば、作中の少年達が「台湾女から物もられるか、馬鹿にするなよ」といって、台湾女工からもらったバイン缶を川に投げ捨てる場面がある。それを見た「僕」の心境が、次のように表現される。

彼女の目が僕の日を見つめた。それは射抜かれた魚の瞳孔のように痛ましかった。僕は指先に彼女の目の傷口の感触を感じた。

沖繩の少年達に迫害される彼女の〈心理〉的な「痛み」が、「僕」には、テラピアを射抜く時の指先の「感触」として伝わる。少年達への好意が、理不尽な仕打ちとして返ってくるというのは、「K」にとつてあくまで心理的な「痛み」であったはずだ。目取真俊はあえてそれを、〈心理〉(内面)を表象することによってではなく、「触覚」をなかだちとした「痛み」として描いている。痛みを与える／与えられるという自他の関係を、身体的感覚として表象することによって顕在化させているとも言える。さら

に、作者は、眼を射抜くという行為だけでなく、その「痛み」を感じている他者からの跳ね返りをも表現する。

僕が放つ矢の鋭い針先がその標的を貫く。しなやかに跳ねまわる魚の眼球から僕は針を抜きとって、ぼつりと空いた傷口の上に指先をあてる。冷たい感触と抵抗する生命の確かな弾力が、僕の指先に集中した神経繊維毛の戦きと興奮を一挙に駆き立て、やがて静かな陶酔に変えてゆく。

少年達が感知しようとしているのは、テラピアを射抜く行為の結果として感覚される「抵抗する生命の確かな弾力」であり、「痛み」を感じている他者からの「反駁」である。

西成彦は、この目取真俊の表現を「ぶつかりあう筋肉を通した歴史の探求」であると述べている。西は、擬人法という文学的表象は「階級分化と動物の家畜化とが同一現象の表と裏であること」に対するニンゲンの洞察の産物」であったと論じ、「魚群記」を書いた目取真俊の試みを「ニンゲンが動物化され、動物がニンゲン化されていく状況の中で、ひたすら他者の筋肉から何かを学ぼうとすること」にあつたと述べている。

さらに指摘したいのは、このテラピアの眼を射抜く行為は、「性交」のメタファーとしても機能している点である。

僕は幻の彼女と体を重ね合わせるようにして、部屋の中

にうつ伏せになり目を閉じた。瞳孔を射抜かれて川の底へと消えていったテラピアの姿が闇に浮かぶ。テラピアは西陽に側面をきらめかせながら、静かに体を波打たせている。屹立する矢が水面下に消えていく。僕の指先に魚の眼球の感触が蘇り、彼女の深い瞳が魚の瞳孔と重なり合う。僕は死期の迫った魚のように体を波打たせ、細かい痙攣をくり返した。そして静かに闇の中へ消えていった。

これは「僕」と「K」の「擬似性交」の描写である。「僕」は「幻の彼女」と体を重ね合わせることを夢想しながら、「指先に魚の眼球の感触が蘇り、彼女の深い瞳が魚の瞳孔に重なり合う」のである。台湾女工Ⅱテラピアのメタファーは、レイピストとして振舞う沖縄男性の醜さをあぶりだす表現としても機能している。少年達は村の生活から隔離されているバリケードを突き破り、女子寮のまわりを徘徊する。「この前Tらが来た時にはとても面白かったって、あちこちの部屋でやってたってさ」と「N」は言っている。「僕」は恋焦がれる台湾女工の部屋を眺め、「魚のように静かに腰を動かし」、自慰行為にふけるが、少年達は覗きの現場を押さえられ、台湾女工の部屋から出てきた青年達に目撃される。

「何だ、お前の弟じゃないか」一人の青年が僕に気付いて言った。「ふん」兄は鼻でせせら笑うと、僕ら一人一人を張り

倒し、「二度とここに来るなよ。今日のことは親に黙ってるからな。お前らも何も言うなよ」と脅して僕らを帰した。

「僕」を含めた沖縄人は、ここで台湾女工の部屋への侵入という「秘密」を共有することになる。女子寮への侵入は少年達、青年達にとっては「公然の秘密」である。「K」という台湾女性と接触していたのは「僕」やその「兄」ばかりではない。「父」までもが「K」の部屋に入入りしていたことが露見する。台湾女工が出身地へ帰還する日、「僕」は「K」の部屋に侵入するが、そこで「父」を目撃する。

「K」声は再び部屋の中へ呼びかけた。聞き馴れた声だった。(中略)男は今一度未練気に部屋を振り向いた。その姿は、まざれもなく父だった。

この作品は、生々しい性行為の描写は抑制されているが、少年の目を通して暴露的に「レイプ」という事態を描出していると言える。「台湾女」という言葉には、「蔑と猥雑な響き」が込められているのだった。ここには女性の身体を通して駆動する「植民地」のテーマが浮上する。台湾人をレイプする沖縄男性(少年)の主体化のプロセスは、「日本復帰」の政治プロセスと連動しつつ、沖縄人のなかの「日本人」としての優越意識と結びついている。

沖繩の共同体の外部からやってきた最も強大な存在といえれば占領軍や米軍兵士達であるが、「復帰」前に書かれた沖繩文学において、コザのAサインバーで売春婦として働く「ミチコ」、「ヨロコ」といった女性達を登場させた東峰夫「オキナワの少年」や、主人公の娘が顔見知りの「ロバート」にレイプされるとい痛ましい事件を描いた大城立裕「カクテル・パーティー」などは、植民地化・占領という事態が強姦のメタファーを介して表象されている。そこにあるのは、〈強姦される女性〉としての「沖繩」である。新城郁夫は、「米軍占領下の沖繩が（引用者注）米兵による、「レイプ」という暴力によってこそ社会的に構造化されているそのことを表出してきた営為として、戦後沖繩文学は読み返されなければならない」と述べているが、「魚群記」の目取真俊は、この「レイプ」表象を〈強姦する男性〉＝「沖繩」としてのイメージに反転させている。目取真俊は、〈外来〉者＝米軍の加害者を告発する以前に、もうひとつの〈外来〉者＝台湾女工に対する（自己の）加害者を徹底して問い詰めようとする。「マーの見た空」では、「日中国交回復」によって台湾女工が忽然と姿を消した後に、現地に残された「混血児」（強姦から生まれた子供）の問題に焦点を当てている。

### 3、抹消された存在／記憶

「マーの見た空」は、語り手の祖父が語ったという「夜の海を

さまよう人魂」のエピソードから書きはじめられている。

祖父は海底に引き込まれるような感覚に襲われる。そして薄れゆく意識の底で、鼠火花のように激しく回転しながら輝きを増してゆく人魂が、その極点で無数の光の粒子へ砕け散ったと思った瞬間、ある大きな叫び声を聞くのだという。（中略）それは聞く者の胸に忘れ難い痛みを刻む声であり、人間の魂の奥底へ突き抜けていく叫び声なのだ、と祖父は眠りに落ちていく僕の耳に囁いた。

「僕」は子供の頃、「マー」の発する「オー……ン」という不思議な叫び声を幾度となく聞いている。祖父の語る「人魂」の「叫び声」は、この「マー」の声と響きあっている。「マー」は、村の民話やフォークロアの中の存在であるかのように語られている。台湾女性と沖繩男性との間に生まれた「マー」は、村の男たちに殺された後、暗黙のうちに村の記憶から消し去られた（とされる）人物である。この作品は、語り手の「僕」が、「M」という幼馴染の女性とともに、子供時代の過去の記憶を想起しながら、「マー」の辿った数奇な人生を探っていくという展開になっている。

「僕」は沖繩島北部の出身で、現在は「N市」のアパートでひとり暮らしをする大学生。しばらく実家に帰省していないが、母からの電話で、成人式の日には村に帰ってくるように言われる。

「僕」は成人式に出る気はないが、幼い頃の「M」の幻影を思い出し、それとともに「マー」という声を聞いてしまう。「僕」が帰省しようと思ったのはMのためではなかった。Mの幻影とともに訪れたひとつの名前が、僕をとらえて放さなかったのだ。

帰省した「僕」は、小学校五年生の頃、「この川で魚とともに過ごした」ことを思い出す。

工場の排液で在来の魚類が次々と死に絶えていくのとは異腹に、驚異的な繁殖力をもったテラピアは川の汚染も苦にせずが増え続け、冬でも陽が射せば川底から亡霊のように浮かび上がり、群れをなして川面をさまようのだった。

「僕」は「マー」と一緒にテラピア釣りに熱中している。「マー」の銚の扱いは巧みで、「賛嘆と憧憬的」であった。ところが、中学生の「ジン」のグループが、「マー」の釣ったテラピアを「いきなり野鷄のように筋張った足で踏みつけ」る。「マー」は「痛ましい目をして、銚で突き破られた腹から血と生臭い泥が溢れ出すのを見つめている」。「マー」は、「ジン」に踏みじられるテラピアの痛みを、自己身体の傷みとして感応する。さらに「ジン」らは、「テラピアみたいにあれを出してみろよ」と射精を強要し、「マー」が嫌がると「その顔を打」つ。言われるままに射精を終えると、「マー」は、「オー……シン」という叫び声を発し、「水棲動物のように素晴らしい勢い」で水に飛び込み、消え

去っていくのであった。テラピアで遊んでいた記憶は、暴力を振るわれていた「マー」の思い出と結びついている。

「僕」が「マー」の記憶にこだわるのは、二人の間に固有の感情的なやりとりがあったからである。幼い頃、ビー玉遊びに夢中になっていた「僕」とその友人達は、「マー」の持っている「混じり気のない純粋な深みをもつ水色のガラス玉」を欲しがっていた。どのような交換条件にも応じない「マー」に腹を立てた「僕」は、ガラス玉を取り上げ、大きな「合歡の老木」の穴にそれをに入れてしまう。ポケットからナイフを取り出した「僕」は、「ならんど、合歡木、傷付きていやならんど」という「マー」の声を無視して、樹皮に刃を食い込ませた。すると「マー」は、「想像もつかないような勢い」で「僕」に体当たりを食らわせたのである。そのとき「僕」の内に生じた感情は、「怒り」ではなかった。

マーへの怒りや憎しみはなぜか微塵もなかった。侮蔑や妬みさえ消えてしまい、むしろ穏やかな憐憫の思いを抱いていた。僕はマーだけが僕の痛みを共に苦しむことのできる人間だということを、痛ましいくらい澄んだ山羊のような目の中に直感していたのだ。

「僕」は、「マー」に対して単に「憐憫」するだけではない。「僕の痛みを共に苦しむことのできる人間」だと「直感」してい



る。「マー」に振るう暴力が、自らに跳ね返ってくることで、二人の關係のなかに「共感共苦」が生まれている。

さらに、この「合歡の木」は、「マー」にとつて特別な意味が込められているのだつた。「彼方昔ぬ空ぬ映てい居てい、今やなあ居らん者達も、此ぬ空んかいや映てい居るさ……マサシ、吾んが、おつ母ぬ姿ん比ぬ空に見いゆんよ」と「マー」は語っている。「合歡木」の中には大きな穴があり、そこに溜まった水に、母の姿が映っているのだという。そのことを知っているのは、「僕」だけである。

ところが、「帰省した本来の目的であるマーのこと」を同級生に問うと、次のような答えが返ってくる。

「悪いけど、思い出せないよ、マサシ。確かにジンが僕らの捕つた魚を踏みにじつたことは何度かあつたと思うけど、その場にマーという奴がいたかどうかは記憶にないんだ。」

「僕」には「口裏を合わせて嘘をついている」としか思えない。「確かにあの時にもマーは僕らとともにいたはずだ。いや、マーとともに僕らがいたと言つてもいい」。「僕」や「M」には、「マー」の記憶は幼年時代の思い出のなかに確かに存在しているのだが、周囲の村の人々には、彼の記憶は抹消されているのである。「ぼく」は「マー」の祖母という人に会い、その「出生の秘密」を明かされるのだが、そこでは沖縄語で次のように語られてい

た。

「マーぬ病氣や大事な悪つさ事よ、病院に入つちから長ーないしが、なま治らんさ。腎臟ぬ悪つさんよ、マーや。ありが、女親ん、腎臟悪つさる如、有いてーとう、血引ち居いてーさ。色清らさぬ、肝ん清らさぬ、大事な良い女子やたしが、生ちちよーる間や、吾んや此ぬ事分らぬ哀らしみていや……。悪つさたしや、吾達、清一るやたしが。台湾からパイ工場んかい、働きが来い居たる女童んかい、手出じゃち、マー孕まぢやせー。うぬうち、清一や海かてい戻らん、女子やマー生ち腎臟悪つく成い、吾んやな一物分らんないよいーやー、ありからマー取り上げてい、台湾んかい追い返ちやせ。(中略)村ぬ者達ーの言う如、台湾女ぬ血ぬ悪つさ事やあらんよ(以下略)」

ここで老婆が語っているのは、「マー」は、清一という沖縄の男が、台湾からパイ工場へ出稼ぎにきた女性に生ませた子であること。清一は海へ行って戻らなくなり、女性も台湾へ追い返された。それから「マー」は「腎臟」を病んで病院に入ったことになつている。「村ぬ者達ーの言う如、台湾女ぬ血ぬ悪つさ事やあらんよ」とあるように、「マー」が(畸形児)として生まれたのは、台湾女性の血統が「悪い」からだという。台湾女性との接触・性交が、集落の血統に汚染をもたらすということになつてお

り、それでマーは「腎臓病」を患っていることにされているわけである。だが「僕」は「老女が腎臓病という言葉で何かを隠そうとしていることに気付いた」といつている。

さらに、「僕」は、「マーのお母さんは、台湾の人だったってね」と母に伝えると、「何で、あんたがそういうことまで知っているね……」と言われてしまう。そして、「ふと、そのことについて、何か触れてはならない秘密が、母を含めた村の人の中にあるような気がした」とある。

「M」は、「マー」に性的暴力を受けたことがあり、これまで誰にも明かさなかった「その夜」に起こったことを、「僕」にこう語っている。

「あの日、私の様子がおかしいのに気付いた両親に詰問されて、私はマーにされたことを話したの。その夜、何があつたかは、子供の私は知る術もなかった。ただ、私が知っているのは、その夜、とうとう父が帰ってこなかったことと、マーが村から居なくなり、私達は暗黙のうちにマーのことを一切、記憶から消し去るように強いられたこと」

これを聞いた「僕」は、あの夜、父と数名の男たちが異常に興奮した様子で、「寝ろ」と恐ろしい形相で言い、夜の雨をおかし外に出て行ったことを思い出す。それから「マー」は村からいなくなつたのだという。村の男たちによってマーは殺され、それ

からは「マー」のことを一切、記憶から消し去るように強いられた」のだった。

「マー」という死者にまつわる固有の記憶は決して語られない「秘密」となっており、さらに「僕」にとつても「M」にとつても、おぼろな「記憶」としてのみ語られているだけである。「マー」を殺害したという事実、そのことを起点として派生する様々な「秘密」の網目が、この共同体の内部に張り巡らされている。

さらに、重要なのは、語り手の「僕」は、母親に成人式に出席するように嘆願されても、それを執拗に断り続けていることである。おそらくそのこととマーの「記憶」の問題とは無関係ではない。新城郁夫は、目取真作品における「少年」の造形を、方法化されたモチーフ（企て）として位置付けて、「目取真俊の小説における少年は、忘却との闘争の場となり、そして、時空間に限定されずに遍在化する物語の戦略となる」と優れた指摘をしている。この場合、「少年とは、年少であるといった実体」ではなく、「記憶という装置によって現象化してしまう物語の企て」なのである。新城は、「企てとしての少年」の具体化を「水滴」の「徳正」に見ているが、それは、「マーの見た空」の「僕」にも当てはまるといえる。

「僕」が成人式に決して参加しないことには、時間的経過のなかに「マー」という固有の死者の「記憶」を抹消しようとする共同体の意志に抗うという意味を持たされている。時間的経過によってヒトが成長するという自明な時間感覚に反逆し、過去から現

在へという時間の流れを寸断する装置として「僕」が存在する。時間的経過によって固有の「記憶」が抹消されるとすれば、ヒトの成長（＝時間的経過）を祝う儀式は、「僕」にとつて拒否すべきものとなる。それは「記憶」を現在化させるための戦略なのである。

#### 4、〈畸形児〉としてのマー

次に、「マー」の身体形象やその比喩表現に注目してみたい。

岩の上に立ったマーの体は、遅しくはあつたが妙にいびつな形をしていた。長い腕と盛り上がった肩や胸の筋肉に比べて、はるかに貧弱な下肢の歪みが、殻を割られたヤドカリを思い出させる。鳩尾の少し上のあたりに、三つ目の乳首と見紛うばかりの大きな突起状の黒子があり、それを中心にして、うつつすらと胸毛が生え始めていた。

「マー」の身体の〈畸形〉性は、極端に誇張されている。この作品は、〈畸形児〉としての「マー」の形象を動物に重ね合わせた描写が、多用されている。右の引用では「殻を割られたヤドカリ」にたとえられている。作品の後半、「僕」と「M」が「マー」の墓を訪れた帰り、川口に行くと、「一匹の死んだテラピア」を目撃する。死骸には「暗い穴がひとつ開いて」おり、「それはや

わらかな眼球が食い尽くされた眼窩だった」とある。テラピアの死骸が、「マー」の死のメタファーとして、ここでは表現されている。他にも、「マー」は「水棲動物のように素晴らしい勢いで動き、闘牛大会では「水を得た魚のように」という表現そのままに敏捷さを見せるといふ。「僕」の実家の庭木の描写には、「冬の夜気に打たれて、生気のない葉を密生させたそれらは、どれも自然の成長を阻まれて衰弱した愛玩動物を想わせた」とある。「僕」には、庭木が「愛玩動物」に見えるのである。これは集落の人々に迫害される（愛玩される）「マー」の形象と重なりあう。「マー」は徹底して動物化されるのである。

もう一つは、村の青年達が「山羊」を解体している場面である。

骨張っているが、若々しいしなやかな肉体をした山羊は、甘ったるい籠えたような臭いを発して、アダンの幹を弓形にしならせている。白痴の青年のような顔がのけぞり、そのために異様に長く見える喉に、掌を重ねて差し込める程の深い裂け目が開いていた。あの奇妙な声は、剥き出した青黒い長い舌に食い込むくらいきつく前歯を噛みしめている口から漏れているのではなく、その喉の傷口からじかに漏れているのだった。

ここでは、「マー」にふるう暴力の比喩として、山羊の解体が

描かれている。この「白痴の青年のような顔」とは、「マー」の顔をあらわしている。さらに「喉の傷口からじかに漏れている」という「あの奇妙な声」は、「マー」の発する声でもあるのだろう。村の大人達が「マー」を殺害した実際の場面は描かれないが、その様子が、山羊の解体に重ねあわせられていると思われる。

僕は三人の青年達の手が、少女を弄ぶように淫らに山羊を解体する様を思い描いた。青年らの掌に密着し、指紋の溝を埋める内臓の柔かな粘膜の触感が、青年らの血に粘りのある情欲を誘発する……。

この文章は、村の青年達の実際の行為ではなく、「僕」のなかの想像である。「指紋の溝を埋める内臓の柔らかな粘膜の触感」とは、かつてテラピアを釣っては眼球を射抜く感触に夢中になっていた幼年時代の「僕」の行動と等価である。

さらに、「マー」の身体形象は極端に男性化されてもいる。彼は「喧嘩牛」を引き連れる闘牛士であり、ときに物凄い力で「僕」を跳ね飛ばしたりしている。「マー」が闘牛場に闖入する場面には、このような描写がある。

マーは怒張した性器を露わにし、太い指で握りしめると、老木の洞のような口に雨を降らせて、自らを慰めはじめた。そして、全身を突っ張ると、泥の中に青白い液体を噴出し

た。

「マー」の射精の場面は幾度も繰り返されるが、彼は異常な性欲に苛まれている存在である。「M」の記憶には、小学校四年生の頃に、「ズボンのベルトを弛めて、剥き出しにしたもの」を口に含ませられた記憶があり、「僕」の記憶にも「マー」の仕打ちに耐えているMの幻影」が浮かび上がる。作品のラストは「マー」のかつて住んでいた家で「M」が忽然と連れ去られるシーンで終わるが、最後は次のような文章で閉じられている。

次から次へと合歓木の奥から噴き出し、狂ったように真冬の乱舞を行っている羽蟻は、廃屋から飛び立ったものも混じり合い、空と地面を覆い尽くしている。僕は口の中に入り込んだ羽蟻を吐き捨てると、怒りに震える叫びを發し、真冬の生殖の乱舞を見上げて立ち尽くしていた。

この「真冬の生殖の乱舞」とは「M」と「マー」の交接のメタファーとして、ここでは表現されている。「満たされぬ欲望に苛まれ、殺意に駆られているようだった」といわれる「マー」は、自分の意志に関わらず、過剰な性欲のゆえに「M」に性的暴行をはたらく。沖繩／台湾の関係をめぐる、強姦のメタファーを媒介にした一連の表現は、ここで残酷な「転倒」を見せる。「魚群記」と「マー」の見た空」の主題を連続させて考えたとき、「マー」の

身体形象は、明らかに、男性身体による沖縄への（反逆）という意味を持たされている。人種差別と性差別の交差する「混血児」の形象を、目取真俊はあえて、レイピストとしての「宿命」を背負わされた「不幸な肉体」の持ち主として描き出した。「M」を連れ去る「マー」の行為は許されるものではない。しかし、「マー」を「不幸な肉体」として生ませたのは誰なのか。頂点の見えない植民地主義暴力の連鎖のなかで、沖縄社会を内部／外部から蝕み、互いに殺し合わせる見えない権力の網の目をここで目取真俊は告発しているのだろうか。これは、植民地化＝強姦という、不均衡な男女関係を媒介にした安易な文学表象に対抗する、ある意味で露悪的な表現技法の選択なのである。

## 5、結びにかえて

一九七〇年代前後、沖縄現地から、おもに『琉大文学』出身の批評家たちによって「反復婦」論が展開された。それは、沖縄の「異族性」を根拠に国家への帰属を拒否する思想であったが、岡本恵徳、川満信一、新川明らの仕事を拒否する思想であったが、屋嘉比取は、「反復婦」論を「思想資源」と位置づけ、「後に続く世代としてそれをどう考えるか」と問いかけている。「反復婦」論者のなかでも強烈なインパクトを残した新川明は次のように書き残していた。

沖縄人はその「ヤマトウンチュ」たちと同一民族であり、同一の主権国家に属する同一の国民でありながらも、なお、あくまで「ウチナンチュ」であり続けるのである。

このような沖縄人の特質ともいふべき日本と日本人に対する「異質感」あるいは「差意識」は、近代に至るまで日本と別個の国家形態を形成し、かつ独自の文化的領域を占めてきた歴史的、地理的の諸条件によって培われてきたもので、明治の「琉球処分」のあと上から強権的に推進された皇民化やそれと対応して沖縄の側から熱烈に希求された同化（日本国民＝日本人化）への努力にもかかわらず、沖縄人の意識の基層で今日なお脈々として生きつづけている。

新川は、日本国民国家の同化の圧力に抵抗し、沖縄に固有のアイデンティティを主張している。しかし、「日本と別個の国家形態を形成し、かつ独自の文化的領域を占めてきた歴史的、地理的の諸条件」をいうとき、沖縄の古代への遡行を幻視し、その共同体の起源を根拠として沖縄の「異族性」を主張してしまう。ここには、沖縄という場の同一性（アイデンティティ）から排除される存在を問う視点が欠けている。「復婦」に抵抗する言説であれ、「ウチナンチュ」という共同性の立ち上げは、沖縄内部の差異や差別構造を覆う。目取真俊の「魚群記」「マーの見た空」は、「日本復婦」後に書かれたものだが、この二作は当時の言説状況を相対化した作品としてとらえることができる。

目取真俊は、「魚群記」執筆から十六年後に、「台湾への旅」と題したエッセイで「日本復帰」前、私が生まれ育った村のパイプ工場にも、台湾から出稼ぎにきている女工たちがいた。当時小学生だった私は、彼女たちを「台湾女」と呼んでいた。(中略)その記憶は、沖繩が被害者や被差別者一辺倒ではなく、加害者や差別者でもあることを気づかせるきっかけの一つとなったし、そのような問題意識から「魚群記」という小説を書き出した」と書いている。

「魚群記」「マールの見た空」において目取真俊が試みたのは、沖繩人の「内なる加害者性」を抉り出す作業であった。「日本」や「米軍」といった、圧倒的な暴力として顕現し、ある意味で「見えやすい敵」の加害者性を告発する立場に身を置くというのではなく、沖繩内部で複雑に張り巡らされた迫害・差別のネットワークを凝視している。被害者がたやすく加害者／共犯者へと絡めとられる様相。その不可視の暴力性を、動物への嗜虐的な暴力行爲を執拗に描くことで、身体的な「痛み」として顕在化させているのである。その表現の志向性や問題意識が、目取真俊の作家活動の出発点になっている点は特に注目されても良いだろう。

## 注

- (1) 大江健三郎『沖繩ノート』(岩波書店 一九七〇・九)。  
 (2) 『沖繩ノート』における大江の国民国家的、「日本人」論的な思考に対しては、すでにいくつもの批判がなされて

いる。たとえば、新城郁夫「日本を逆さに吊す」―来るべき沖繩文学のために―(『到来する沖繩』所収 インパクト出版会 二〇〇七・一一)、西川長夫「マルチニクから沖繩へ」(『新』植民地主義論―グローバル化時代の植民地主義を問う)所収 平凡社 二〇〇六・八)。

- (3) 『沖繩ノート』とほぼ同時期に発表された「南島言説」としては、吉本隆明の「母性論」(『共同幻想論』所収 河出書房 一九六八・一二)、「異族の論理」(『情況』一九六九・一二)、谷川健一「沖繩 辺境の時間と空間」(三一書房 一九七〇・六)「沖繩学の展開のために」(谷川健一編『叢書 わが沖繩』第五巻所収 水耳社 一九七〇・一)などがある。

- (4) E・W・サイード『オリエンタリズム』(今沢紀子訳 平凡社ライブラリー 二〇〇六・四)。

- (5) 村井紀『新版・南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義―』(岩波現代文庫 二〇〇四・五、初版は、福武書店 一九九二・四)。村井は、柳田国男にはじまる「南島論」についてこう述べている。「同質的な「日本」という作為された「政治」的な神話(イデオロギー)を作り出す役割を担わされているように思われる。実際の沖繩とは別に「原日本」として見いだされる「南島」は、自己同一的な「日本」を作り出すために差異として措定され、馴致され、鋳型に流し込まれているからである」。また、花

田俊典「沖繩はゴジラかー」(反) オリエンタリズム／南島／ヤポネシア」(花書院 二〇〇六・六)、田仲康博「風景の裂け目ー沖繩、占領の今ー」(せりか書房 二〇一〇・四)なども、沖繩を「原日本」として同定する思考に批判をなげかけている。

(6) 「魚群記」は「第一一回琉球新報短編小説賞受賞作」として「琉球新報」(朝刊 一九八三・一二・九)に掲載。

『沖繩文学全集』第九卷(国書刊行会 一九九〇・九)に再録。その後「平和通りと名付けられた街を歩いて」(影書房 二〇〇三・一〇)収録。

(7) 「マーの見た空」(原題「マー」)は、「季刊おきなわ」第二号(一九八五・九)及び「季刊おきなわ」第二号(一九八五・一二)に掲載。『平和通りと名付けられた街を歩いて』(影書房 二〇〇三・一〇)に再録。

(8) 林発「沖繩・パイン産業史」(沖繩パイン産業史刊行会 一九八四・一)。

(9) 「魚群記」「マーの見た空」の作品の舞台となったのは、おそらく、今帰仁村の呉我山(こがやま)部落である。『沖繩国頭の村落』(津波高志著 新星図書出版 一九八二・九)によれば、呉我山の「部落内を南北に流れるウフンジャ(大井川)は、下流では村役場の所在する仲宗根部落に注いでいる」という。作中に登場する「テラピア」はこのウフンジャ(大井川)に棲息していたと考えられ

る。さらに、「終戦後は一九五〇年頃より、パインが栽培されるようになり、現在、ミカンとともに当部落の主要産物となっている。部落内でパイン工場は一九五六年より操業を開始した。現在は、部落所有であった工場は民間企業と合併するに至っている」という。

(10) 『沖繩大百科事典』中巻(沖繩タイムス社 一九八三・四)。

(11) 朱恵足「目取真後「魚群記」における皮膚ー色素／触覚／インターフェース」(『現代思想』二〇〇一・一〇)は、沖繩人と台湾人の肌の色の差異に注目し、「彼女たちの白くて美しい肌」が、「欲望の対象でありながら(／＼であるがゆえに)忌むべき汚物となる」と指摘している。それは、「沖繩人が本土で差別を受ける際、「黒い肌」がその中でも目立つ特徴」であり、その「コンプレックス」が台湾女工に対する憧れ、嫉妬に「転化」したからだと述べている。だが、「日本復帰」前後に、沖繩人の「黒い肌」が原因で「同化の推進」が阻まれたという論理には根拠がないように思われる。

(12) 西成彦「暴れるテラピアの筋肉に触れる」(『複数の沖繩 ディアスポラから希望へ』所収 人文書院 二〇〇三・二)。

(13) 東峰夫「オキナワの少年」(『文学界』一九七二・一一)。

- (14) 大城立裕「カクテル・パーティー」(『新沖縄文学』一九六七・八)。
- (15) 新城郁夫「米軍占領下の沖縄文学―異文化接触という隠蔽に抗って―」(『Intercommunication』二〇〇三・一〇)。
- (16) 新城郁夫「企てとしての少年―目取真俊論―」(『沖縄文学という企て』所収 インパクト出版会 二〇〇三・一〇、初出は『新潮』一九九八・八)。
- (17) この点を指摘したのは西成彦、注(12)であり、本稿は氏の研究に基づいている。目取真俊は、初期短編集を収録した『平和通りと名付けられた街を歩いて』(影書房 二〇〇三・一〇)の「あとがき」で、テラピアを傍役として登場させた作品群についてこう記している。「『魚群記』を書いたときに、村の中央を流れる川とそこに生きるテラピアを共通点とする小説が、他に四作構想された。「マ―の見た空」はそのひとつである。小説の中に台湾の女性が出てくるのは、ほぼ同時期に構想されたことによる。ちなみに、他の三作は「風音」「ブラジルおじい酒」となり、もう一作は未完である」。
- (18) 屋嘉比取「基調講演・『反復帰論』を、いかに接木するか―反復帰論、共和社会憲法案、平和憲法」(『情況』第三期、二〇〇八・一〇)。
- (19) 新川明「幻像としての(日本(ヤマト))」(『反国家の凶区―沖縄・自立への視点』所収 社会評論社 一九九六・九、初出は『中央公論』一九七一・九)。
- (20) 目取真俊「台湾への旅」(『沖縄ノ草の声・根の意志』所収 世織書房 二〇〇一・九、初出は『琉球新報』朝刊 二〇〇〇・九・二)。

## 付記

・本稿における「魚群記」「マ―の見た空」の引用は、『平和通りと名付けられた街を歩いて』(影書房 二〇〇三・一〇)の本文に拠った。

(やまはら・きみあき 本学博士前期課程)